
マブラヴ if

カンキチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴ i f

【Nコード】

N0890L

【作者名】

カンキチ

【あらすじ】

マブラヴとオリキャラの作品の二番目です。ゲームクリアと共に書き出した作品で、後一つ別のマブラヴシリーズも考えてます。評価次第でどちらを連載するか決めますので、そちらもご覧ください。

第一話

「…これは、いくら何でも辛すぎるだろ…」

俺は今、友達からやってみると勧められたゲーム、マブラヴ
オルタネイティブをやっている。友達曰く、「中身はちとグロテ
スクだし、鬱になるシーンもあるけど基本面白い」ということでや
ってみた所……はまった。はまってしまったさ。近年稀に見る程
の大ヒット。これで暫くおごりは決定だな…。

佐渡島の戦いが終わった所で時計を見ると、既に一時を回って
いた。ヤバイ、大学は休みでもバイトはあったんだ！！

俺はそこでセーブを済ませると、直ぐにパソコンの電源を落と
して布団に潜り込んだ。

「……………」

ん？

「…れ……タ……ち……て」

何だ、何で声が聞こえるんだ？俺は眠ったはずなのに…。

『ほっ……。この声が聞こえるのかや、お主は？』

ッ！？ 誰だ！？

『おっと、これは失礼した。我は………そうだな、お主らの言うところの世界の管理者といったところかのう？』

世界の…管理者？まさか。こんなのは只の出来が良い夢だ…

『違う。これは現実…ではないが本当の事だの。夢であればこのような会話が成り立つわけもあるまい？まあ、このような話、いきなり言われて信じろとは無理があるのもわかる。まず、これを見るがよい。話はそれからじゃ』

管理者と名乗った存在が何かを振るったような気配がした。すると、次の瞬間には俺の目の前に地球が現れた。それもいくつも…。

『これは我が管理している世界だ。まあ、世界と言っても数は無限に等しくてな、我は地球を中心とした世界を担当している。故に管理者と名乗らせてもらった。…さて、これで信じてもらえたかの、八神 拓人？』

「！？俺の…名前…。今の話、本当なんだな？」

『そうじゃ、と先程から何度も申しておるう？…まあよい。理解ができたところで、お主にやってもらいたい事がある』

「…俺に、か？」

『うむ。実は我が管理している世界の一つがおかしくなっちゃってな、時が進まなくなっちゃったのだ。主にはその原因説明、それと原因の排除を頼みたい』

「…時間がループしている世界、だと？ …まさかその世界、外宇宙から来た資源採掘用生体ユニットに侵略を受けて人類滅亡の

危機に晒されている世界……なわけないか」

『……………何で知っておるのじゃ！？お主の言う通り、今言つた世界はBETAと呼ばれる生物によって滅びかけておるのだ！滅びかけているのが原因か、はたまた別の管理者の介入か……。こちらが調べようにも世界には直接干渉出来ぬのだ。だから……』

「俺にやって欲しい、と……。ちなみに勘だ」

BETAの単語で確信した。間違いなくこれはマブラヴの世界だ。でも、マブラヴの世界があるとは……。アイツが聞いたら喜びそうな話だな……。つと、今はそれどころじゃない。マブラヴの話に介入出来るんだ。ならあんな悲惨な物語を変えることができるかもしれない……！！だがその前に……

「管理者、その仕事、受けてもいいが俺は一般人だ。そこそこ体力には自信があつても、特別力が強いわけでも頭が良いわけでもない」

『……つまり、何かしらの手助け、または力を与えよ、ということか？』

「ああ。話かはええじゃねえか」

『それなら任せよ。主には身体強化、治癒力強化、戦術機の操縦、現実世界からの物体の持ち込みを授ける予定だった。それに、後一つ二つなら余程の事が無い限り叶えてやれる。……どうする？やるか、やらぬか。全てはお主次第じゃ』

何を今更、だな。俺の答えは決まってるよ、管理者！

「やらせてもらおう。その大役、この俺が必ず成し遂げてやる

……」

『……………』

言い切ってから暫く、管理者は沈黙。…プレッシャーをかけるな。

『…わかった。では、お主に任せるとするかの。…世界を頼むぞ』

「……応よ！」

『よし、ではお主は何か他に必要な力はあるか？不老不死や、命を弄るようなことは出来ぬが、それ以外なら基本何でも叶えよう。我は主を気に入ったからな！』

お、ラッキー！これならアレとアレとコレを持っていける！！……かも。

「すまんが管理者、今から行く世界に他世界の機動兵器を持っていくのは可能か？」

『…またそれが。構わん…のだがの？…まあお主なら大丈夫であろう。因みにどのような兵器を持ち込みたいのじゃ？』

「ガンダムSEEDに出ているオーブのアストレイシリーズ、その派生機を含めた全てのデータと設計図に整備施設。できれば、アストレイの完成品も何機か欲しいがな」

『……………』

あゝ、悩んでる悩んでる。やっぱし難しいのか？

『……大丈夫だが、その代わりお主の行動範囲がかなり狭くなってしまうが良いのか？』

「……（通った！！） ああ、大丈夫だ。それぐらいは覚悟の上だからな」

『わかった。完成機じゃが、お主は戦ごとはまるっきりの素人。故に予備パーツを多めにしてお主の側に五機ほど出しておこう。整

備施設なのじゃが、これは専門の整備士と一緒に送る故、向こうの施設を使ってくれ。代用は充分可能な筈じゃからな。製造工場は自分で交渉してくれ。これ以上の介入は世界を壊しかねんからの」

「わかった。……………って、今更なんだが何故SEEDを知っている！？マブラヴ世界の管理者の筈じゃ…」

『？ マブラヴとは知らぬが、我は先に言っただであらう？ 地球を中心とした世界’の管理者だと。それはもちろん空想の世界も含んでおる。まあ、我らにとってどれが空想かどうかはわからんがの』

あ、呆れなくてものが言えなくなっただけ。ならさつさと別の世界の技術なり兵器なり送り込めば……………って、それが出来ないからこんなことしてるんだよな。……………って、ん？ 地球を中心とした世界’ってことは、まさか……………！

「おい、管理者。あんたが管理している世界に超能力者を開発している世界ってのはあるか？」

『ほう、勘で言っただのならお主の想像力は凄まじいな。確かにあるぞよ』

「では、その世界の超能力’レールガン超電磁砲’、テレポート空間移動’、アクセラレータ一方通行’、テレパス精神感応・念話’の四つを貰いたいのだが？」

『四つだけなら構わないじゃろう。では、以上で良いな？ そろそろ時間も無くなってきてな。お主は時間が止まりループを開始している日……………2001年10月22日に飛んでもらう。そこには同じくループを繰り返している者もいる故、何かと協力ができるであろう。…ではあの世界を頼む。消滅させるには惜しい世界だからな』

「ああ、必ず……………！」

そして、視界が白一色に染まったと同時に、俺・八神 拓人・は世界から消え、マブラヴの世界に旅立った。

第二話

10月22日 13:00

「うつ…。こ、こは？」

拓人が目を覚ますと、そこは暗いコックピットの中だった。手探りで、何故かわかる起動操作を行いコンソールの電源を入れ、機体を起動させる。コンソールを見ると、目の前に半壊した家と撃震の残骸が映っていた。カメラを左に向ければモビルスーツサイズの大型コンテナが四個にそれより小さめのコンテナが三個、アイドリングしているトレーラーに接続していた。

「ここは、武の家か？……………撃震があるから間違いない。あのトレーラーがアストレイと予備パーツに整備士？か。ま、今は武を探さないと……………っ!？」

いざ横浜基地に向かおうと機体を立ち上がらせると、左側に丁度しゃがんでいた性で見えなかった青色の不知火と目があった。

……………。

『っ！その機体、今すぐ停止しろ!!』

「つて、ちょ!?!何でこんな所に不知火がんだよ!!」

『もう一度言っ！その機体、直ちに機体を停止させて所属を述べよ!』

青色って事は国連軍機…しかも不知火でこの声って！

「ちょっ、ちょっと待って下さい！貴女は伊隅ヴァルキリーズ

の方ですね？俺は八神 拓人。…第三計画の実験体で、第四計画協力の為に参りました。横浜基地副司令の香月博士にお取り次ぎ願います」

予定外の接触だったが、ひとまず計画通りに行く。オルタネイティブ4と香月博士関係の事は全部報告されるはずだから、これで面会ぐらいには漕ぎ着けられる。後はどうやって香月博士の興味を惹けるかにかかっているな。

『証拠もないのに信じられるわけがなかるう』

「証拠は俺の乗っている機体とトレーラーだ。それに第三計画の力はオルタネイティブ4の香月博士以外に見せるわけにはいかんのでな」

『……わかった。少し待て』

さて、向こうが通信中の間にこっちは整備士と話しておこう。

「トレーラー、聞こえるか？」

『……うん。はれ？ここ何処ですか？』

「気絶、してたのか？大丈夫か？」

『あ、はい。大丈夫です…。 あっ、そっか。ここが…！コホン…。失礼しました。私の名前はマリエル・アテンザ。管理者によって生み出されたアストレイシリーズの整備士兼サポーターです。以後よろしく願います』

通信に出たのは、オレンジ色のツナギを着て栗色のロングヘアに眼鏡をかけた同い年ぐらいの少女だった。生み出された、って事はこの娘…。

『…悲しむことはありません。私がここにいるのは私自信の意思です。それに、ここに来る前は戦闘で死にかけていましたから、

あなたと管理者には逆に感謝しているんですよ。もう一度生きてアストレイ達の整備ができるのですから！」

「そっか。俺は八神 拓人。よろしくな、マリエル！」

『はいです！』

力強く言い切ったマリエルの言葉に嘘はなく、本当に感謝していることが伝わってきた。このパートナーとは上手くやっていける、そう直感する拓人であった。

『おい、その…八神とか言ったな。副司令から許可が下りた。着いてこい！…下手な真似をした場合撃墜の許可は降りている。大人しくしているよ…？』

「り、了解です！」

こうして、俺とマリエルは横浜基地に向かうこととなった。

） 横浜基地 戦術機格納庫 （

「うっわ、広！それに戦術機が何十機も…。実際に見ると壮観だな」

格納庫に案内された俺とマリエルは、整備兵達の好機の視線を浴びながらヴァルキリーズ専用の格納スペースまで歩いて来た。他のトレーラーはマリエルからの指示で動いてきたので一緒に来ている。

『よし、止まれ。お前の機体とコンテナは一番奥のハンガーに固定しろ。それが終わり次第、身体検査その他諸々フルコースをしてから副司令の所まで案内してやる』

「…わかりました」

若干憂鬱になりながらも、言われた通り一番奥のハンガーに機体を入れる。固定させてから電源を落とし機体から降りた。

「はあ！？な、ちよつ！？」

「どうしましたです、拓人？何か不都合でも？」

「あ、ああ。マリエルか。不都合なんてもんじゃねえよ！どうして機体がM1アストレイなんだ！？」

「ああ！それは私の元愛機でして、拓人の練習用も兼ねてるからです！いきなりド素人に高価なプロトシリーズやムラサメを預けるわけにもいかなかったので、私が頼んで送ってもらいました！」

マリエルの言葉を聞いて不覚にもがっくりとしました…。くそお、最初からレッドフレームとかブルーフレームセカンドに乗れると思った俺が甘かったのね…。

「何を話している？早くいくぞ。副司令だってお忙しいんだ」

「ごめんなさー！い！すぐに行きますですー！さ、拓人、行きますよ？」

「…ああ」

基地内部にあるエレベーターに乗り込み、警備兵達に一時間以上も念入りに身体検査をし、やっと香月博士と面会が許可された。

「な、長かったな…」

「…そうですね。ただ、警備兵が女性で助かりました。もしあれが男にされていたとしたら……」

ああ、マリエルが鬱に入ってる。相当嫌なトラウマになりそうなことされたんだろうな…。

そうこうしている内に、俺達は伊隅大尉（エレベーターの中で名前を名乗り合った）は二つのドアの前で立ち止まり、こちらを向いた。

「私の案内はここまでだ。副司令はこのドアの向こうにいる。くれぐれも失礼の無いようにな」

「わかってますよ。怒らせたら命がないですしね」

「……ふっ、子供なのに変わったヤツだ。社少尉とは大違いだな」

「…失礼ながら俺は十九です。子供じゃありません！」

「…そうか。そういうのはもう少し、背が延びてから、言うんだな。ではな、八神、マリエル」

伊隅大尉は第三計画の事も霞関係で少しは知っていたらしく、エレベーターで自己紹介を兼ねて少し話をしたら気に入ってもらえたみたいで、纏っていた空気が少しだけ優しくなったのだ。

おっと、そういえばこれからが本番なんだ。気を引き締めて…！

「失礼します」

「ようこそ、第三計画の被験者くん。歓迎するわよ」

部屋に入ると、奥のデスクに座った女性…香月　夕呼と、そのデスクの前に立っている少年…白銀　武がいた。

「単刀直入に聞いわ。白銀、アンタはこの子、知ってるの？」

「…いいえ。少なくとも前の世界にはいませんでした」

「なるほど。じゃあ聞いわ。何者？」

香月博士の執務室は、とても重たい空気で包まれていた。目の前にいる武も夕呼も宗一から視線を外さずじつとこちらを見ている。あまりのプレッシャーに膝が笑いそうになるが気力で押さえ込み、言葉を紡ぐ。

「自分…俺は、そこにいる白銀武と同じ存在であり、オルタネイティブ3のESP発現体の変異種である、と思っています」

「…どうということ？」

よし、食いついた！

「まず一つ目、俺が白銀と同じ存在だと言った訳ですが、俺はこの世界の未来を断片的にだけ知っています。そして、俺の世界にもBETAなんて存在しない平和な世界だったからです。そして二つ目、ESP発現体の変異種と言った理由は、これです」

そう言つと僕は手を上にあげて超電磁砲^{レールガン}の力、発電能力^{エレクトロマスター}を使い電気を発生させる。そしておまけで念話能力で二人…いや、三人にメッセージを送る。

『これが証拠です。一応向こうの部屋にいる女の子にも送つて
ますよ』

「「っ！！」」

「……霞の事も気づいていた、か。なら、本当なのかもしれないわね」

「わかって頂けて良かったです。香月博士、少しいいですか？
白銀に聞きたいことがあるんです」

「俺にか？」

「ああ。答えによつてはこれから先の行動が決まるんでな」

「……わかった」

「じゃあ……。『桜花作戦』、知っているか？」

これを知っていれば三回目、知らなければ一回目が二回目になる。
さて、どうかな？

「……悪いけど知らない。俺が知ってるのはオルタネイティブ5
の発動とその間に起きたことだけだ」

「……わかった。ありがとうございます。では香月博士、お願いします。
もちろんそれ相応の対価もあります」

「対価……ね。大方あの戦術機の技術協力位でしょ？なら用は……」

「00ユニットの完成法とBETAの情報、知りたくないですか？」

「ッ！00ユニットまで知っているとはね……。それにBETA
の情報……。わかったわ、アンタのお願いとやら、できる範囲ならや
つてあげるわ」

「ありがとうございます！じゃあ早速。俺とマリエルをA-0
1部隊に入れてください。マリエルはコンテナに入っている機体の
整備士兼僕が乗ってきた機体のパイロットです。軍は違えど訓練を
受けた正規兵なので安心してください」

「…ダメよ。訓練も何も無しにA―01には入れられないわ。

それにアンタ、戦闘に関してはド素人でしょ？なら尚更入れられないわ。入りたいのなら白銀と一緒に207分小隊に入ってもらうか實力を見せなさい。あ、勿論マリエルも一緒。これは譲れないわ」

「拓人、私は香月副司令に賛成ですよ？最低でも基礎訓練は受けないと、強化されたアストレイやムラサメの操縦中に気絶します」

「うっ…。わかりました。ではもう二つ、訓練ではハンガーに置いてあるM1アストレを使う事と、第90番格納庫まで入れるIDをお願いします。そこなら他のコンテナに入ってる機体も出して整備や調査も出来るし、機密も大丈夫ですよね？」

「それぐらいならいいわ。それじゃあ今夜中にはID作つとくからさつさとトレーラーを運び込みなさい。あ、後アンタの部屋は外にいる霞が白銀と一緒に案内するわ。機体の方だけど、基地には試作の戦術機で通していくから。いい？わかったなら出ていきなさい。今別件で忙しいから00ユニットに関しては後で聞くわ」

「わかりました。では失礼しました」

そして武と一緒に部屋を出ると、入口の側に黒い耳みたいな力チューシャを付けた銀髪の少女がいた。

「……………こちらです」

あんまり喋ってはくれないか。まあ初対面だから仕方ないか。

「よろしくな、霞。……………って、ごめん。まだ名前教えてなかったな。俺は白銀 武、よろしくな」

「俺は八神 拓人、よろしくな、社」

「マリエル・アテンザです。よろしくね、霞ちゃん！」

「……………よろしく願います。私の事は霞で構いません」

「わかった。じゃあ俺も名前でもいいからな」

かわいらしくコクツと頷く霞。何だか癒されるぜ…。

「…なあ、拓人。お前が俺と一緒に言っただけで、どういうことだ？少なくとも前の世界にはお前はいなかったぞ？」

「さあ？俺にもわかんねえよ。ただ、研究所みたいな所で目が覚めたら頭の中にBETAとアストレイ、未来の事、00ユニットの情報が入っていたんだよ」

「……………マリエルさんとは、どこで会ったのですか？」

お、霞自ら質問してくるとは驚きだ。武だって驚いてるし。

「うゝん、マリエルは…」

「宗一、いくらなんでも喋りすぎです。契約違反になりますよ」

「…というわけだからごめん、言えないや」

「……………いえ、気にしないでください」

それから無言で目的地の部屋まで歩いて行ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0890/>

マブラヴ if

2010年11月20日01時03分発行